

夜の前奏

しじまの中にうつむくほどに
しじまの中に哀しみをこらえるほどに
黒い葉影がしなだれかかり
流れる水が私を引き寄せ

しじまの中に見上げるほどに
しじまの中にこらえきれぬほどに
星の瞬きがこぼれ落ち
私からとめどなくこぼれ落ちる 淋しさ

下降するパッセージと跳躍とが
そこそこに瞬時、小さな姿を追いかけ
消えてはまた、ふと横手に背後に気配を生じ
私の肩をちょっと叩いてはまた、消えてしまう

ひっそりとガラスのような暗さは涼しく
全ては沈むかに思えるがなお身じろぎせぬまま
ただひとつ聞こえるものと言えは
このしじまと静寂をふれ合う私の息づかい

こうして私は腰を下ろす
こうして私は夜と語り合いはじめる

(1984.6.6)